

(一番好きだった先生は、) 高校の古典の上岡
静子先生である。先生は、確か東京大学を卒
業したてで、若くて元気な非常に魅力的な女
性であった。よく学生たちとソフトボールを
やっていたのを覚えている。自分は先生にあ
こがれ、(恋心を強く感じた。) それで、一生懸
命勉強し、クラスではいつもトップの成績だ
った。ある日、(先生が) 文章をを読んで(解釈す
るようにおっしゃったので、) 自分なりの解釈
をすると、先生が非常に驚き、どうしてその
解釈を思いついたのかと訊かれるので、辞書
でそれぞれの言葉の意味を調べ、文法を考え
るとこれが一番妥当な意味だと思ったと答え
ると、先生は、今学会であなたの解釈が、大
きな話題になっているとのこと、クラス全体
が「わーすごい」ということになった。自分
は他の学生と異なり、いわゆる解釈本を買わ
ずに辞書だけで勉強していたので、褒められ
て本当にうれしかった。このように学生の実
力を認め、評価することが、学生にとってい

「私の一番好きな先生」 太田 徳夫

かに励みになるかを示す好例であるが、中間試験で満点を取ったと思っていたら、平仮名一つ間違えただけで一点引かれていたのは本当に悔しかった。(先生に文句を言いに行くと、でもやはりクラスで一番だからいいじゃないと言われたが、そういう問題じゃないと不満だった。若くて未経験の先生は、中間試験が易しすぎたと思われたのであろう。期末試験は、難しくはなかったが、非常に長く、私も時間が足りなくて全部の質問に答えられなかった。戻ってきた試験を見ると、七十八点だったと思う。また先生の所に行って、時間があったら、満点が取れたと、不平を言うと、でもやはりあなたがクラスでトップだったとおっしゃる。自分ながら、「そうじゃないんだ」と非常に憤慨したことを覚えている。自分も教師生活が長くなるが、公平な試験の大切さはここで学んだと思う。反面教師としても、上岡先生から教わったことは今でも生きていけると言える。)